

ダーシィ・マクニクル『包囲されて』

——合州国先住民の小説——

西村 頼 男

序

合州国先住民の文学活動はレッドパワーの勃興とともに隆盛を迎えるが、1968年に出版されたN.スコット・ママディの『夜明けの家』がピューリッツア賞を受賞したことは先住民の文学者一般にとって意義深い出来事である。ヨーロッパ人が北アメリカ大陸に住むようになったために、19世紀末には絶滅の危機に直面した先住民だが、その人口は20世紀後半になって著しく増加している。今日、その人口の増加に呼応する、先住民作家の活躍は注目に値する。元来の文学は口承文学である諸部族の子孫たちは今や、英語という表現媒体を通して作品を数多く発表している。

ママディの作品が先住民文学にルネッサンスをもたらす契機となったことは事実であるが、彼に先行する文学者たちの存在も忘れてはならない。その一人がダーシィ・マクニクルである。

マクニクルは1904年にモンタナ州に生まれ、1977年にニューメキシコ州で亡くなった。彼の作品の数は少なく、文学史上で彼の名前は『包囲されて』（1936）と『敵の空より吹く風』（死後出版、1978）の二冊の小説によって残ることであろう。また、彼の名前は先住民の権利回復運動においても記憶されることであろう。すなわち、連邦政府のインディアン対策局の行政官として活躍したことは重要である。また、人類学者として果たした役割もある。部族の血筋からいえば、彼は今日カナダに住むクリー族の血を引いている。

第1長編『包囲されて』は、1978年にニューメキシコ大学出版局から再版が出てはじめて数多くの読者の眼に触れた。この作品の初版が1936年に出版されたときは、わずかに29冊しか売れなかったのであるが、レッドパワーの隆盛とともにこの作品は本格的な評価の対象となった。その結果、1990年、1992年、そして、1996年に彼の生涯や文学を扱った単独の研究書が出版されるに至った。これら以外に、彼の作品を個別に扱った論文は批評集に掲載されている。

1

マクニクルの作品はきわめて少ないが、この『包囲されて』が執筆された時代的背景および作者の個人的事情などは看過できない。死後出版の『敵の空より吹く風』は作者が生存中推敲を重ねた小説であるが、その第1長編との大きな相違点のひとつは、舞台の普遍性である。すなわち、

物語は特定の地域で展開されるのではなくて、合州国西部の、河川のある不特定の地域が舞台である。したがって、部族も架空の部族である。ところが、この『包囲されて』はモンタナ州のセイリッシュ族の住む地で起こる物語である。さらに、主人公はアーチャイルド・レオンという若い男性であり、白人社会で生きた経験をもつ。作品に内在するこのような要素の他にも、次のような看過できない事実がある。

マクニクルの母親はフランス人の血が入ったクリー族であり、父親はアイルランド人の農民であったが、母親は、自分の子供たちにはわずかに $\frac{1}{8}$ しかクリー族の血が入っていないという理由で、子供を白人として育てたいという願望をもっていた¹⁾。そして、実際にマクニクルは保留地外にある連邦政府の全寮制学校（チェマワ・インディアン・スクール）に3年間在籍した。その後、彼はモンタナ州立大学で教育を受け、短期間だがイギリスのオックスフォード大学でも学んだ。しかしながら、彼は1929年の大恐慌がアメリカ社会を襲ったとき、ニューヨークに住んでいたためにその衝撃をまともに食らうことになった。それ以前にも彼は生活のためにフィラデルフィアで自動車のセールスマンとして働いた経験があった。大恐慌のときにはジェームズ・T・ホワイト・アンド・カンパニーで、編集・執筆の仕事に従事していた。

チェマワ・インディアン・スクールで習得したバイオリンが彼をますます音楽好きにしていたが、彼は大恐慌を契機にしてアメリカ社会への洞察を確実に深めていった。その結果、彼は自らが「脱出」した保留地のことを思い、先住民の社会に価値を見出し、先住民の生き方を評価するようになった。彼の内面におけるこの劇的な価値の転換は『包囲されて』の執筆過程に見てとれる。

彼はこの長編を1920年代後半に書きはじめて、少なくとも5年間はその完成に費やしたが、その手書きの初稿には『ザ・ハングリー・ジェネレーションズ』という標題がついている。これは全体としては自伝的であり、登場人物の多くにはモデルがあった。梗概は次のようである。

主人公アーチャイルド・レオンは混血である。彼の母親はセイリッシュで、父親はスペイン人である。彼はオレゴン州のインディアン全寮制学校に在籍中にバイオリンの弾き方を覚える。彼の腕前はバイオリオンの演奏で生計をたてられるほどであるが、母親と故郷の山々に別れを告げるためにセント・ザビアに戻る。しかしながら、彼には父親とは語るべき共通の話題がない。帰郷した彼は、人生の最後の儀式として山に行きたいという母親の求めに応じて同行する。山中でアーチャイルドの弟ルイスが鳥獣保護官によって射殺されたので、母親キャサリンは保護官を殺す。その後、母子は保護官の死体を掘った穴に埋め、ルイスの死体を埋葬のために家まで運ぶ。保護官の行方不明でアーチャイルドは嫌疑をかけられる。その間に、父親マックスが亡くなり、その遺産が彼のものとなる。そこで、彼はモンタナを後にしてフランス（パリ）に赴くが、その理由はパリこそ文明の中心地だという俗信による。彼はバイオリオン奏者としての成功を夢みてバイオリンを持参する。しかしながら、やがて彼は音楽の勉強を継続すべきか、モンタナに戻るべきかと迷いはじめる。そして、彼の孤独を慰めてくれるアメリカ人女性のクローディアと出会う。結局、これ以上パリに滞在する意義はないと判断した彼はモンタナに戻り、父親から受け継いだ農園で農業に従事する。例の鳥獣保護官の死体は見つかり、彼は逮捕されるが、彼の無実証明される。物語は、次の列車でクローディアが到着するのを待つというロマンチックな終わり方をする。白人の正義は実践され、自分は苦勞したが、逆境を乗り越えられたという信念が彼の

未来を明るくものにしている。²⁾

このきわめて自伝的でロマンチックな物語は若い頃の作者の姿をよく映し出しており、この初稿を執筆中に彼の内面で起きた変化と価値観の転換は注目に値する。

マクニクルはモンタナ州立大学およびオックスフォード大学で学んだが、大学卒業の学位は取得していなかった。そこで、学位を求める彼は1929年の春にコロンビア大学に登録して、初めて本格的にアメリカ史を学んだ。F. J. ターナー、V. L. パリングトン、ピアード夫妻などの歴史書を読むことで、彼の西部史への関心は深まった。しかし残念ながら、1929年10月の大恐慌で彼のコロンビア大学での勉強には終止符が打たれた。マクニクルの西部史への関心は、この作品を執筆する過程で重要な要素であるが、初稿のまま出版を引き受ける出版社はなかった。彼は10社以上から出版を断わられて、幾度か書き直した。その書き直しの過程で、主人公がバリーに赴く部分を削除して、若い女性もクローディアからエリーズ・ラローズという部族の女性を登場させることにした。この登場人物の変更は初稿に見られるロマンチックな結末の否定である。

このような削除・変更があるとはいえ、この作品が初稿の段階から自伝的要素の濃厚な小説であることに変わりはない。すでに言及したように、第2長編『敵の空より吹く風』の舞台は特定の部族の住む地ではない。また、ひとりの若者が主人公でもない。ところが、この第1長編の舞台はモンタナ州であり、部族はセイリッシュである。また、主人公は若く、混血で、全寮制の学校に在籍した経験がある。さらに、バイオリンも習得しており、ヨーロッパ系アメリカ社会に同化した人物である。このような点で、この作品は明確に「自伝的」といえる。

2

「序」で述べたように、この作品が1936年に出版されたときには一般読者の関心を引かなかった。ところが、1990年代に入って単独の研究書が出版されるようになった。この変化はレッドパワーの隆盛との関連で考察するのが至当であろう。

合州国の先住民の人口は1950年には34万、60年には53万、70年には80万、80年には136万である。この数字で注意すべきは、1960年の統計以後は自己申告制を採用している点である。このような急激な人口増の原因としては、先住民として扱われることを望む人間が増加しているからだ³⁾と、ある歴史家は指摘している。

ヨーロッパ人の新大陸に寄せる期待（ロマン主義）の延長線上にある「高貴な野蛮人」神話は1960年代から1970年代初頭のアメリカ社会において、概略次のような典型的な先住民像を作りあげた。(1)先住民は環境保護運動家の先駆けであり、必要なものだけを狩猟した。(2)先住民は原始共産主義的な生き方を実践して、物質的のみならず、精神的な面でも共同体の中で生きた。(3)先住民は超一流の戦士であったが、攻撃を受けた場合に限り戦った。敵に壊滅的な打撃は加えなかった。(4)先住民は生まれながらにして民主主義者であり、部族内の、また、部族間にある意見の相違を簡単に黙許した。(5)先住民は共同体の利害を優先する余り、他者と競争しなかった。(6)先住民は世界と宇宙の営みに関して深遠な知恵を備えていた。白人の到来前には、幸福な、調和のとれた存在でありうるような、根源的な生活のズムを見抜いていた。⁶⁾

この理想像はヨーロッパ系アメリカ人の願望を反映しており、あるいは、アメリカ社会の動きや時代の関心の所在を反映しているといえよう。例えば、(1)はアメリカにおける環境保護運動への関心と関連している。(3)はベトナム戦争に対する反戦運動を想起させるといえよう。ヨーロッパ系アメリカ人は上のような、きわめて自己中心的な理想像を優先する余り、先住民を「高貴な野蛮人」と見なしたいという願望を抑えられなかった。換言すれば、これはヨーロッパ系アメリカ人のアイデンティ探求のひとつの現れともいえよう。

ヨーロッパ系アメリカ人は今日でも理想的先住民像を抱くことで自己のアイデンティ探求心のある程度満足させられるかもしれない。しかしながら、マクニクルが『包囲されて』を執筆していた頃における先住民をめぐる経済的・社会的事情は上のような理想像とは絶対的に相入れないものであった。例えば、先住民の人口は絶対的に少なく、しかも、その大部分は南西部に住んでいた。先住民が所得の面でもきわめて苦しい状況下にあったことはいうまでもない。

作者マクニクルが大恐慌下の都会に住む者として、アメリカ社会の現実を直視したからこそ、「高貴な野蛮人」神話を作りだして自己満足するヨーロッパ系アメリカ人に対して批判的であるのは当然である。したがって、作者は理想的な先住民像の構築に寄与するような小説を書いていない。先住民は1930年代も今日も経済的にも社会的にもヨーロッパ系アメリカ人と完全に分離して生きることは不可能であるが、作者はこの現実を踏まえて、この物語を展開しており、決して部族の伝統文化を単純に賛美していない。これは主人公像を通して明確にされている。

3

以上のような点を踏まえて、この作品を考察すると少なくとも次の4つの特質が浮かびあがってくる。

(イ) この作品の第1の特徴として、メディスン・マンが登場しない。ママディの『夜明けの家』ではロスアンジェルスでの生活に馴染めない主人公エイベルが、全インディアン救済伝道団のトサマー師の主催する集会に出て、都会生活の緊張から解放されるのを願う箇所がある。トサマー師はメディスン・マンとはされていないが、役割としてはそれに近い⁷⁾。また、レズリー・マーモン・シルコウの『儀式』(1977)⁸⁾では、メディスン・マンに明確な役割が付与されている。主人公のタオスは太平洋戦争に従軍したことによる心の傷を1番目のメディスン・マンによって癒されない。しかしながら、2番目のメディスン・マンによって癒される。シルコウにとっては作品の標題が明示するように、「儀式」が必須であり、したがって、儀式を執り行うメディスン・マンは不可欠な存在である。ところが、マクニクルはこの作品にメディスン・マンを登場させていない。年長者としてはモデステが登場するが、彼は決してメディスン・マンではない。モデステは母親の叔父であって、部族の年長者として部族をまとめてゆく役割を担っているにすぎない。シルコウに代表されるように、現代の先住民小説においてメディスン・マンの果たす役割は大きいが、マクニクルはそれとは対照的にメディスン・マンを登場させていない。

(ロ) 主人公の帰郷は断固とした部族文化の肯定に基づいていない。作者は作品の冒頭で、帰郷したアーチャイルドが故郷に留まらないかも知れないことを繰り返し暗示している。そのうえ、

彼の外観は部族社会の人間のものとは思えない。すなわち、彼が身につけている青いスーツ、白いシャツ、タン革色の靴は新調品である。⁹⁾

主人公の故郷に対する曖昧な態度は母親とともに山に行ったときにさらに明確になる。すなわち、母子が山で夜を過ごしたときの様子を描写した部分である。空には星がまたたいている。よく見れば草の上にも星が——草の葉の先端に、氷になった露がある。フクロウが呼び交わしている。夜は歳月を経ても変わっていない。それから、彼の心の中でイメージの転換が起こる。彼は、人々が街路を、大きな部屋の中を動いている都会（どんな都会であってもよい）の光がきらりと光るのを見る。別の世界の光と音と臭い。そんなことを思うと、彼は山の今の状態も、昔の状態も気にならなくなる。そんな思いが波のように彼に押し寄せてくる。この彼の故郷は風変わりなクニである。¹⁰⁾

(イ) この作品における自然（山）はもはや荒々しい野生を帯びていない。これこそ、この作品が『包囲されて』と命名されている理由といえる。アーチャイルドが、母親の希望にそって山に行き行って発見することは、狩猟の対象となる動物の激滅である。激滅した動物にとって代わって山にいるものは人間であり、それも法の番人である。先住民は保安官と鳥獣保護官の2人によってその行動を監視されており、アーチャイルドとキャサリンには昔日のような行動の自由はもはやない。また保安官のデーブ・クイグリーは保留地に住む先住民たちに恐れられている存在である。山中においてアーチャイルドとキャサリンに合流するのはルイスであるが、彼は鳥獣保護官に誤解されて射殺されてしまう。我が子を眼前で射殺されたキャサリンは斧という伝統的な道具で保護官を殺害するが、殺人事件はこれで終わらずに、物語の最後でもう1度起こる。すなわち、エリーズ・ラローズ、アーチャイルドと2人の子供（アーチャイルドの甥）は山に逃げ込むが、保安官と出会う。アーチャイルドは保安官に同行して出張所に向かうつもりであるが、アーチャイルドが逮捕されるのを恐れたエリーズが保安官を殺害する。

結局、この作品では3人が殺害されることになり、先住民にとってかつては聖なる場所であった所は永久に失われる。また、キャサリンにとっても保護官を殺害した後に迎える春はもはや心踊るような生命感には満ちていない。¹¹⁾ 荒々しい野生の消えた山は今や保安官と鳥獣保護官の存在によって山は政治性を帯びている。保護官は、雌シカの狩猟を禁止した法律があることをアーチャイルドたちに告げるが、これは、山ばかりではなく、狩猟の対象である動物もすでに先住民の意思の及ばないものであると教えていることになる。

山が狩猟の場でなくなっていることは別の方法でも暗示されている。すなわち、アーチャイルドが母親の求めに応じて山に行った際に、母親に見せる猟師としての失態がある。彼は自分の猟師としての腕前を信頼している母親の期待を裏切りたくはない。しかしながら、彼は水を飲み終えた雄ジカが鼻口部から水をしたたらせている姿を眼にすると、発砲できない。その理由は、自分の生存がもはや狩猟にかかっていないことを自覚したからである。¹²⁾

狩猟が先住民にとって象徴的な行為であることを考えるとき、このアーチャイルドの行動には作者の時代・社会認識が込められているといえよう。これはマクニクルよりも後代の作家であるママディの『夜明けの家』では、伝統的な狩猟の意味が強調されているのとは対象的である。¹³⁾

(ニ) 作者はアーチャイルドの想像力を強調している。第2章には次のような箇所がある。アーチャイルドは帰郷後間もなく、夜、小川のそばにある古びた丸太に腰をおろしている。小川の水

はなお昼間と同じく、小さな渦を巻いており、石にぶつかっている。フクロウの鳴き声が聞こえる。キイチゴの香がして、濡れた砂利の臭いがする。また、魚の臭いがするとアーチャイルドは思う。しかしながら、それは想像のつくりだしたものである。奇妙なことに、こういうもののイメージが人間の生活の中に入り込んでいる。手で触れることはできないのに、迫力があり、実態がある。アーチャイルドはそういう牽引力に引かれて遠い遠いところから戻ってきたのである。¹⁴⁾

4

今日、合州国先住民の文学はルネッサンスという名前に相応しく、現在活躍中の作家は作品を発表し続けている。さらに、現代の先住民作家を扱った批評集、選集、作家案内なども数多く出版されている。分野も多岐にわたっており、日本語に翻訳される作品もある。また、文学関係以外の書物も毎年、日本で出版されている。

現代を批評する基準として先住民の生き方や価値観を賛美することもしばしば見られるが、「高貴な野蛮人」神話を作ることの危険性を忘れてはならない。南北アメリカ大陸には様々な先住民の文化があるのは当然だが、アメリカ合州国の中だけでも先住民の文化は一樣ではない。しかしながら、先住民を賛美する余り、文化の多様性を考慮せずに、先住民一般としてその生き方や価値観を賛美することになりがちである。

われわれ読者はマクニクルがこの作品において、部族の文化や生活を単純に賛美する主人公を登場させていないことに留意する必要がある。前節(4)で紹介したように、アーチャイルドが帰郷するのは母子のつながりが契機である。その契機によって彼は次第に、部族の人間であることを自覚してゆくが、作者は彼を弟ルイスと対照的に描いている。

ルイスは部族社会において、馬泥棒が有能であることの証拠とされた昔の価値観を代表しており、ヨーロッパ系アメリカ人に包囲されてしまった時代においては生計の手段を持たない若者である。人手が不足で困っている父親の刈入れの手伝いもせずに、魚釣りに興じている若者である。一方、アーチャイルドは部族社会の外でも生きられる技能を身に付けている。すなわち、彼は、自分は保留地の外ではバイオリン弾きとして何時でも賃金を稼ぐことができると、帰郷と同時に父親に向かって宣言できる。¹⁵⁾このようなアーチャイルド像の設定は経済的基盤の重要性を強調したものと見えよう。と同時に、ヨーロッパ系アメリカ人に包囲された状況下で生き伸びるには、昔日を懐古するだけでは不十分だという作者の主張の反映でもある。作者がこの主張を作中においてアーチャイルドにはっきりと述べさせている箇所がある。キャサリンは息子の帰郷を祝って親族を招待するが、その席にキャサリンがヨーロッパ系アメリカ人と結婚した衝撃から立ち上がれないひとりの叔母がいる。この叔母が彼に、「昔だったら、あんたの母さんはあんたのことを恥だと思ったことだろう」と言う。すると、彼は腹の立つのを抑えて次のように抗弁する。

ボクが昔に生まれていたら、そうしたら、ボクは今のボクのようにないだろう。みなさんは、あたかも昔が今ここにあるように話す。だけど、昔は過ぎ去って、もはや跡形もない。だから、昔のようになるためにボクがどうすべきかとお説教するのは止めて欲しい。¹⁶⁾

作者は、昔日を懐古することに夢中になるのをやめて、ヨーロッパ系アメリカ人に包囲されている状況を生き伸びるための方策を身につける重要性を説いているようである。

先住民文学（小説）においてメディスン・マンや儀式としての狩猟が占める役割は大きい。しかしながら、現実の先住民は混血も多く、昔の生活を維持している部族民の数は少なく、地域的にも限定されている。また、先祖の地や保留地を出て都会に住む先住民も多い。また、先住民の伝統的文化は広大な土地と自然を前提とする。ところが自然（山）はヨーロッパ系アメリカ人の法律の支配を受けるようになってしまった。このような諸事情を考慮に入れるとき、マクニクルがこの作品でアーチャイルドの想像力を強調しているのには意味がある。すなわち、先住民は部族伝来の地、あるいは、部族と関連のある保留地に住まなくても、伝統、歴史、記憶、民話・神話などを通して先住民としてのアイデンティティをもつことは可能だといえる。¹⁷⁾ マクニクルの考え方は純血派（保守派）先住民の側からは批判されるかもしれないが、連邦政府の行政官の経験もある彼としては現実的な結論であろう。

- 1) Dorothy R. Parker, *Singing an Indian Song: A Biography of D'Arcy McNickle* (University of Nebraska Press. Lincoln, Nebraska: 1992), 18.
- 2) *Ibid.*, 40-41.
- 3) William T. Hagan, *American Indians* (3rd edition / The University of Chicago Press. Chicago, Ill.: 1993), 200.
- 4) これに対する異論は次の書物で展開されている。Calvin Martin, *Keepers of the Game: Indian-Animal Relationships and the Fur Trade* (University of California Press. Berkeley, Calif.: 1978).
- 5) 好戦的部族もあれば、そうでない部族もある。
- 6) Frederick Turner (ed.), *The Portable North American Indian Reader* (Viking Press. New York: 1973), "introduction," 10.
- 7) N. Scott Momaday, *House Made of Dawn* (Harper & Row, Publishers. New York: 1968), 87-136.
- 8) Leslie Marmon Silko, *Ceremony* (Viking Press. New York: 1977).
- 9) D'Arcy McNickle, *The Surrounded* (University of New Mexico Press. Albuquerque, New Mexico: 1977), 2.
- 10) *Ibid.*, 121-23.
- 11) *Ibid.*, 120.
- 12) *Ibid.*, 168.
- 13) N. Scott Momaday, *House Made of Dawn*, 198-204.
- 14) D'Arcy McNickle, *The Surrounded*, 16.
- 15) *Ibid.*, 2.
- 16) *Ibid.*, 63.
- 17) Herthad D. Wong, "Nature in Native American Literature," in *American Nature Writers* edited by John Elder (Charles Scribners Sons. New York: 1996), Vol. II, 1142.